

②⑨ 飄一翁七霜忌追福句合摺

飄一翁七霜忌追福句合

さ、なみに角くむ芦の光りかな
 人なれし葛西の鶴や別れ霜
 梅か香に金屏さふき書院かな
 しふい茶も名の通りけり坊か花
 骨おしみするや田打のやとひ人
 花守か妻や月夜の小せんとく
 棋に一間からる、花の居なし哉
 赤松の雫にそたつすみれかな
 生花のもくろみするや春の雨
 うめ咲やたてこめてをく御成の間
 遠矢射る人の見とれるひはりかな
 客ふりに畑をほめる花見かな
 梅さくや山さとありく菓子おろし
 三味線の稽古聞ゆる柳かな
 春深き藪となりけり落つはき
 協寮の茶をへらさる、茶摘かな
 地形するひ、きに落る椿かな
 約束の花見手を打日和也
 腹のたつ時は柳かくすりかな
 湖の空のひくさはなく蛙
 はるの水わかゆく方へなかれけり
 なの花や堤普請の人通り
 花の雨にあふり流れつ塩肴
 余念なきさまに昏けり夕柳
 なの花に井出の玉かは濁りけり
 蝶々の羽風のみかな草の上
 暮るのも惜からぬ花の月夜哉
 二月や涅槃参を二日から
 風呂焚の団扇にはこふ椿かな
 霞む日や京てわすれし舟の酔
 雪をれの竹たてか、る椿哉
 藪潜る女の声やうめの花
 昼寝する狐をおとす霞かな
 法楽の芝居はしまるひかん哉
 雨風のぬくもり見ゆる木芽かな

一笑 兔月 一開 尺雲 亜蓼 永堂 山石 三子 雪兆 草居 葛窓 尺山 至中 眉月 砂文 文来 一秀 鳥梭 松風 花香 ふさ女 青雨 票旦 八翠 西木 凉々 竹水 自耕 仙一 甘林 淇翠 万山 風笑

三省 継穂して雨もつ空を宵寝かな
 山内の子供喧嘩や落椿
 萩我

太田 十中 黄鳥の来てしつまるや暮あらしひ
 同 方居 手さくりのやみにも青き柳かな

玉造 蔵六 世を横に任分別かはなのやと
 同 鬼年 花にふる雨くれなひにみゆる哉

栗崎 關住 月や雪と人はいはれてちる花か
 唐緡 泊るには小一里はやし藤の花

茶仁 初草や先からさきの松のかけ
 布玉 陽炎や一鞍すみし馬の顔

美丸 ひらふたる矢をもて帰る田打哉
 橘香 番祢宜の退屈かほや藤のはな

梅笠 春かせや湖水の鮎の田へあかる
 南化 蝶を見て工夫のつくや茄子代

達山 普茶にゆく連をまたせて継穂哉
 雪仁 藍くさきなかれに殖る烏芋かな

松沓 家鴨なく家や庭まであしの角
 補 雪仁 家鴨なく家や庭まであしの角

判者 杜年 とんとも一はたらきや海士かつま
 杜年 丁酉二月

孤山 動くたひのひる心の柳かな
 孤山 立ならふ柳や月の玉すたれ

月舟 吹こほす井戸こゝろよき柳哉
 吐月 舟ゆたりく柳の綱手かな

月窓 旭をふくむ柳に風のなくもかな
 月窓 旭をふくむ柳に風のなくもかな

蟻道 竈獅子のあきとに分る柳哉
 蟻道 竈獅子のあきとに分る柳哉

柏翁 青柳や腰のまからぬ鞆目付
 柏翁 青柳や腰のまからぬ鞆目付

丑とし

③⑩ 新年摺

千古庵 柏翁